ケイト・W・ナカイ著(平石直昭・小島康敬・黒住真訳)

『新井白石の政治戦略 ――儒学と史論』

(東京大学出版会・二〇〇一年

前 田 勉

ことに加えて、歴史・制度・地理・経済・詩文・言語などの分の儒学者のなかで稀有といってもよい、白石の政治行動を理解の儒学者のなかで稀有といってもよい、白石の政治行動を理解のようなものであったのかを測定することは、容易なことではかも、そうした政治的舞台のなかで、白石の演じた役割がどのようなものであったのかを測定することは、容易なことではのようなものであったのかを測定することは、容易なことではのようなものであったのかを測定することは、容易なことでは、多くの研究上の困難がともな新井白石を理解することには、多くの研究上の困難がともなった。

といえよう。

もできない、そうしたある種の行き詰まりに白石研究はあったもできない、そうしたある種の行き詰まりに白石研究はあった恵であると。これらの評語は、もちろん間違いではないにしても、たが世日本思想史上、類稀なる「合理主義者」「実証主義者」であると。これらの評語は、もちろん間違いではないにしても、とうした研究上の難しさにもかかわらず(否、それゆえに)、立てして、大時代的なレッテルだけが流通することになる。日本間には、大時代的なレッテルだけが流通することになる。日本間には、大時代的なレッテルだけが流通することになる。日本できない、そうしたある種の行き詰まりに白石研究に少しでも手を楽めた者は、大時代的なレッテルだけが流通することなどは、あの膨大な白石の著作を前にした時、はるか彼方の夢のようにあの膨大な白石の著作を前にした時、はるか彼方の夢のようにある種の行き詰まりに白石研究はあったもできない、そうしたある種の行き詰まりに白石研究はあったもできない、そうしたある種の行き詰まりに白石研究にあった。

する。そして、思想と政治行動とを内的一貫性をもって関連づする。そして、思想と政治行動とを内的一貫性をもって関連づな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事に突破した。ここに、くっきりと描き出さな論証によって見事がある。そして、思想と政治行動とを内的一貫性をもって関連づする。そして、思想と政治行動とを内的一貫性をもって関連づする。そして、思想と政治行動とを内的一貫性をもって関連づする。そして、思想と政治行動とを内的一貫性をもって関連づいます。

りなく研究領域は広がり、陥る危険があるとともに、

るだけでも、至難の事業である。そのため、研究の瑣末主義に高水準の成果を残している)ために、その一つを個別にとりあげ野にわたっている(しかも、それぞれの分野において、当時の最

白石の全体像はますますかすんでい研究者が真摯であればあるほど、限

い。 ここでは、ナカイ氏の白石像を検討してみた が大論があるとすれば、どこに問題があるのか。ちょうど もし反対論があるとすれば、どこに問題があるのか。ちょうど 説を無批判に受けいれることには、慎重でありたいとも思う。 と立場に立って、ここでは、大力イ氏の所 な立場に立って、ここでは、ナカイ氏の方法論に、評者自身、

本書の全体の構成は以下の通りである。序章「本書の目的」、年書の全体の構成は以下の通りである。序章「本書の目的」、第二章「京帝では以下の通りである。序章「本書の目的」、本書の全体の構成は以下の通りである。序章「本書の目的」、本書の全体の構成は以下の通りである。序章「本書の目的」、本書の全体の構成は以下の通りである。序章「本書の目的」、

2

のボールを操る曲芸師の技の奥にあるものを探ることだと譬えしていると指摘する。その首尾一貫性を把握することは、多くしていたかが明らかにされている。以下、その内容を簡単に紹介とその背景が、後半部では、経綸の正当化がどのようになされとその背景が、後半部では、経綸の正当化がどのようになされををの背景が、後半部では、経綸の正当化がどのようになされたのが出いる。以下、白石の政治的経綸本書は前半部(第一章から第四章まで)で、白石の政治的経綸

ている。以下、本論に入る。

コミットし、安易に日本の思想的政治的環境に妥協しない白石 と相互作用をひきおこしたと論ずる。そして、儒学の真正性に の特殊性こそが、彼の提案した政策やその政策が採用されるた 者の社会的な位置である。さらに大事なことは、「白石の地位 関係を、勘定奉行荻原重秀と白石との対立をからめて、『折た を担う孟子の自律的な態度が、「一匹狼」的な強烈な白石の個性 するための知的な「武器」であったことを指摘し、さらに「道」 めにとった戦略を性格付けた」(四○頁)ことであると注意する つは、幕府内での白石の地位の不明確さ・曖昧さ、ひいては儒 を批判する。ここでナカイ氏が明らかにしたかったことのひと にもとづいて、三者の利害関係を一致するものとする旧来の説 かす。このことによって、「君臣水魚」と白石自ら語ったこと 用することによって、白石を相対化・客観化しながら、 く柴の記』ばかりか『白石日記』『鳩巣書簡』などの資料を援 第二章。ナカイ氏は、白石にとって儒学は周囲の世界に対処 第一章では、白石と家宣、間部詮房との三者の微妙で複雑な

を示さず、将軍権威の増大化を図ろうとしたことが指摘されると、また官僚制の機構改革では、白石が有能な人材登用に関心では、白石の影響力が、彼が自負するほどに大きくなかったこ行政問題が取上げられる。通貨改鋳・長崎貿易などの経済改革第三章では、正徳の治における白石の経綸のなかで、経済・

の姿勢のなかに、企ての最終的失敗の要因を示唆する

る「聖人」「王」として将軍権威を高めようとしたことが論じとともに、大名の領国支配権を弱め、天下万民の福祉を確保す

られる。

戦術は、反対論が前提とする枠組みのなかで、武家の伝統を読 侵害しているというものである。これに対して、白石の戦略・ 林信篤との論争が中心となる。反論のひとつは将軍の支配の規 に、武家諸法度・官位体系の検討を通して、大名・幕臣に対し 礼や朝鮮通信使の際の「日本国王」復号を企てたとする。さら そのため、白石は朝廷に対して将軍権威を高めようと、幕府儀 規範からすれば、「武」だけを担う将軍は真の君主ではない。 は文武・聖俗を統合する包括的な権威の原理であり、その価値 づける。ナカイ氏によれば、その戦略を導いた儒教の政治思想 戦略と、官位などの朝廷依存的なそれとの絡み合いを指摘した は、家康の神格化のような幕府権力の正統化における自律的な を示す諸象徴の再定義にかかわる問題が追究される。 み替え、さらに「国王」号を擁護したと論じている。 範に逸れているとするものであり、もうひとつは朝廷の大権を に対する反論を検討する。具体的には、老中らの後ろ盾をもつ 第五章では、白石の将軍権威の象徴を作り直そうとする努力 第四章では、白石の関与した政策の中で中心となる将軍権威 白石が前者の戦略を強力に推し進めたと、政治史的に位置 白石が包括的な将軍権威の確立を目ざしていたと論ずる。 ナカイ氏

権威を自ら放棄したことを指摘し、後醍醐天皇の失敗とともに述し、天皇の人格的な清廉さ、天皇が「文」と「武」の包括的配の血筋が移行する証拠を神話のなかに見出したものとして注配の血筋が移行する証拠を神話のなかに見出したものとして注配の大権をもつことを否定し、さらに天命にもとづいて、支い、『古史通』では、聖なる起源をもつ皇統が日本を支配するした『古史通』では、聖なる起源をもつ皇統が日本を支配するした『古史通』では、皇統の永続性を根拠づけてきた神話の再編正当化戦略として、皇統の永続性を根拠づけてきた神話の再

せ、さらに白石が家康の「始祖の道」を復元しようとする戦略比較しながら、白石における儒教理論の適用の徹底性を際立た「天命」理論にたつはずの林家と水戸学の徳川政権の正統化と値観からすれば、「覇者」であると批判したとする。ナカイ氏は、の後光にたよって自己の権威を高めていたことを、儒教的な価

想を武家支配の伝統に適用して、二分化された主権のパターン

天命の決定的な喪失があったことを、白石は論じているという。

第七章では、白石が皇統に適用したと同様に、儒教の政治思

を批判したとする。ここでは、武家支配者たちが朝廷の正統化

によって、家光以降の支配のあり方を批判したとする。

のっとって、すでに天命を喪失した朝廷から新たな天命の保持に関するものである。白石は前者については、「禅譲」観念に盾とは、権力の移行に関するものと、世界における日本の位置たことによって、引き起こされた矛盾を明らかにする。その矛糸八章では、理論的な「武器」としての儒教の真正さを求め

第六章。包括的な将軍権威の確立をめざそうとする白石の経

の創造によって答えようとしたが、天皇を持ち出さざるをえなるである将軍への主権の「自発的移譲」をもたらそうと努力し者である将軍への主権の「自発的移譲」をもたらそうと努力し者である将軍への主権の「自発的移譲」をもたらそうと努力し者である将軍への主権の「自発的移譲」をもたらそうと努力し者である将軍への主権の「自発的移譲」をもたらそうと努力し者である将軍への主権の「自発的移譲」をもたらそうと努力し

 いところに、挫折の理由があったとする。

中国然とさせることなく、理念と現実の政治状況との間で戦通説化したものだが、ナカイ氏は、たんに普遍主義者として歴とのギャップに果敢に挑戦していった人物として白石を描きだそのギャップに果敢に挑戦していった人物として白石を描きだいている。こうした不適合説は尾藤正英・渡辺浩氏らによってしている。こうした不適合説は尾藤正英・渡辺浩氏らによってしている。こうした不適合説の上にたちながら、儒教的な普遍主義・原理主義の立場から、説の上にたちながら、儒教的な普遍主義・原理主義の立場から、記念と現実の政治状況との間で戦力を表示している。

い、敗れていった白石像を提示した。

よう。ナカイ氏によれば、白石は現実との妥協を拒否したからナカイ氏は、この研究史上の行き詰まりを逆手にとったといえを重んじた朱子学者という評価以上の実りある成果は得られなを重んじた朱子学者という評価以上の実りある成果は得られなを重んじた朱子学者という評価以上の実りある成果は得られなでが、白力に、儒教の真正さを追求した白石はそうした妥協を拒程が主要な研究対象となってきた。ところが、ナカイ氏が指摘程が主要な研究対象となってきた。ところが、ナカイ氏が指摘程が主要な研究対象となってきた。ところが、ナカイ氏が指摘程が主要な研究対象となってきた。ところが、ナカイ氏が指摘を重点に対するに表が、政治的社会的な現実に対する儒教のもちろん、これまでも、政治的社会的な現実に対する儒教のもちろん、これまでも、政治的社会的な現実に対する儒教のもちろん、これまでも、政治的社会の妥協を拒否したから

本書において、ナカイ氏は、「儒教政治思想の命題と徳川政

半から一八世紀前半の政治史・外交史・経済史を読み直すこと実の矛盾が照射される。いわば儒教を方法として、一七世紀後こそ、そこから原理的な儒教の光のもとに、政治・社会的な現

ができるのである。

いる「武器」となったのである。 こうした「現実変革の武器としての儒教」(五六頁)を方法 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の内部 に思われてきたことの相対化・対象化が、幕府の諸政策の方法 として明らかにされたのが、二分化した権威・権力という支配 として明らかにされたのである。

発展させたといえよう。 ところで、ナカイ氏は、白石が朝幕関係において、二分化し ところで、ナカイ氏は、白石が朝幕関係において、二分化し

イ氏自身も指摘するように、白石のなかにもあったことであるれは、朝幕の棲み分け、宗教と政治の分離という発想が、ナカこの易姓革命論のコラリーとして、根本的な問題がある。そ

時的」、派生的なものとして片付けることができるのだろうか。 化された権威・権力を容認したことになるだろう。たんなる「一 通して示されたナカイ氏の理解は説得力をもって、われわれ読 過ぎないのか。もちろん、ナカイ氏の理解は、白石の全体構想 策は「一時的」、あるいは「一つの微弱な底流」(二二一頁)に 九~二一○頁)と、ナカイ氏は説く。はたして、この「分割」 配のあり方を変化させることがなぜ必要なのかについて、 文化的領域における優越的権威を認めたならば、それは将軍支 将軍関係の解決策としてはっきり使い、そして、天皇に宗教・ 文化的領域と政治的領域との一時的な分割を、一時的なものと する儒教の考えに基本的にコミットしていたから、この、宗教・ この点について、「白石は、包括性という王の権威の本性に関 と一等」の解釈であるが、それをどう評価するか (二〇九頁)。 者に迫る。しかし、これだけをみれば、棲み分け、つまり二分 れたものである。これまでも紹介してきたように、本書全体を のなかに、この「分割」策を位置づけることによって導きださ が示した議論の核心を掘り崩すことになったであろう」(二〇 して以上に発展させることはできなかった。その分割を天皇 そこでの焦点のひとつが、『読史余論』の「天子より下れるこ

べたように魅力を感じ、強い賛意を表したいところであるが、カイ氏の描く、原理主義的な白石の構想に対しては、最初に述え、朱子学の理想主義を高く評価している立場からすれば、ナ評者自身、近世国家・社会に朱子学が不適合であったととら

今はあえて保留しておきたい。

4

想家理解の方法論にかかわっている。とらえるかどうか、という問題は、実は思想史研究における思とらえるかどうか、という問題は、実は思想史研究における思決策を「白石が示した議論の核心を掘り崩すことになった」と朝幕の棲み分けを「一時的」なものとするかどうか、この解

時的」、あるいは「議論の核心を掘り崩す」などと解釈せざる 図を想定するから、それに矛盾する議論が出てくると、 たとえば、「礼楽征伐」の「包括的権威」を目指したという意 問もある。それは、たんなる研究者の想像の産物ではないのか。 現代の研究者に理解することなどできるのかという根源的な疑 ともなう。そもそも、思想家の意図など、時代も場所も異なる た。しかし、思想家自身の意図を理解することには、難しさが う。そこには、一種の逆説がある。評者もナカイ氏と同様に、 をえないのではないか。架空の意図をあらかじめ前提としなけ する。この意図を設定することによって、ナカイ氏は白石の多 てしまえば、研究者の無限の恣意にゆだねることになってしま った懐疑のゆえに、思想家の意図を想定すること自体を拒否し れば、もともと矛盾などないのではないか。といって、こうい 面的な活動を内的に首尾一貫するものとして捉えることができ 繰り返すが、ナカイ氏は、白石が儒教的政治思想の原理にた 権威・権力の包括性の樹立をめざす意図をもっていたと

ら、もうひとつの問題点を指摘しておきたい。具体的には、家しかし、その難しさも痛感している。そうした共感的な立場か方法論的には思想家の動機の意味理解を第一義と考えている。

継と八十の宮の婚約に焦点を絞ってみよう。

ナカイ氏は、『古史通』という神話解釈の書から、当時の白とはいかなるものであったのだろうか。事にこそ」(『折たく柴の記』)と嘆いているが、この彼のいう「夢」ことについて、「今は見はてぬ夢なりけれど、誠にありがたきことについて、「今は見はてぬ夢なりけれど、誠にありがたき

はたされるはずの一元的な将軍権力の創出であろう。 という神話解釈の書から 当時の白 という神話解を というな表面的な「朝幕共栄」ではなくて、禅譲の結果がらすれば、白石の見た「夢」は、二分化された権威・権力を とを位置づけ、そして八十の宮降嫁を論じた。ナカイ氏の立場 どを位置づけ、そして八十の宮降嫁を論じた。ナカイ氏の立場 どを位置づけ、そして八十の宮降嫁を論じた。ナカイ氏の 主要な の権威の移譲を促す白石の政治戦略の中で、近衛家への接近な からすれば、白石の見た「夢」は、二分化された権威・権力を 当時の自 はたされるはずの一元的な将軍権力の創出であろう。 当時の自 はたされるはずの一元的な将軍権力の創出であろう。

の婚約に、堯による主権の移譲という意味合いを与えようと望が霊元上皇の娘八十の宮と婚約したことについて、「白石がこでの『古史通』解釈のように、ある直接的・特殊な目的のために書かれたものと限定することには、問題が残るだろう。家継に書かれたものと限定することには、問題が残るだろう。家継に書かれたものと限定すが「鑑」として教訓的・実践的な意たしかに、白石の歴史書が「鑑」として教訓的・実践的な意

から「国王」への予示といえるのか、そのような思いにとらわ統の「国王」への予示といえるのか、そのような思いにとらわれの、と説かれるとき、眼から鱗が落ちる思いをすると同時への来るべき権威の移譲を予示するものだったのである」(二人頁)と説かれるとき、眼から鱗が落ちる思いをすると同時に、たんなる語呂合わせ以上の意味をもっているのかという思いらまた、禁じえない。たんに天統の始祖「天御中主神」と国に、たんなる語呂合わせ以上の意味をもっているのかという思いらまた、禁じえない。たんに天統の始祖「天御中主神」とあがら「国」主統の「国」で、ことのでは、その直後に『古史通』を幕府に提出していたことんだことは、その直後に『古史通』を幕府に提出していたことんだことは、その直後に『古史通』を幕府に提出していたこと

ある。本書が後学に与えた強いインパクトの拙い一例として、すべて評者自身の問題関心に強引に引きつけた一面的なもので評者には思えたので、あえて林信篤的な反対論を提出したが、しかし、それが本書の全体構想と方法にかかわるものであると、よ、「木を見て森を見ず」式の末梢的な解釈であるかもしれない。先にあげた『読史余論』にせよ、この八十の宮降嫁問題にせ先にあげた『読史余論』にせよ、この八十の宮降嫁問題にせ

(愛知教育大学助教授

ナカイ氏の寛恕を請う。

前田勉著

『近世神道と国学』

(ぺりかん社・二〇〇二年)

美由紀

本書は、一九九六年に『近世日本の儒学と兵学』によって儒学と兵学の対向という独自の視点から近世思想史を分析することで、その全体像の再構築を目指すという意欲的な研究で思想とで、その全体像の再構築を目指すという意欲的な研究で思想とで、その全体像の再構築を目指すという意欲的な研究で思想と言っても神道と国学における「現人神天皇」や「日本」そして「神」をめぐる言説、戦後の思想史研究において、意識的にせよ無意識的にせよ、それを真正面から論ずることが忌避されてきた問題に果敢に立ち向かい、それが近世思想史を分析することが、現代の我々の問題としても極めて重要な問題であることらず、現代の我々の問題としても極めて重要な問題であることらず、現代の我々の問題としても極めて重要な問題であることらず、現代の我々の問題としても極めて重要な問題であることを、読者の前に明瞭に示したことにある。

143 書 評

そして「神」の存在を価値の中核に据える神道と国学は、その

戦後の日本思想史研究のなかで、「現人神天皇」や「日本」